

○愛知女子短大 岡野雅子

日進病院 石黒聖子

〔目的〕我が国が他の諸外国に類を見ない急速な勢いで今後、高齢化社会を迎えることは、近年、各方面から指摘されている。広義の発達心理学の観点に立つ時、加齢に伴う人間のさまざまな変化について明らかにすることは、このような状況において社会から要請された今日的課題の一つであると思われる。本報告では、老人期の加齢に伴う精神機能の変化の様相と、言語活動の変化の様相の関連について検討し、正しい認識に基づいた対応や処遇のあり方を探るための一助としたい。

〔方法〕対象者：明らかなる器質的言語障害（失語症など）を持たない老人病院入院患者7名（平均年齢76才、男18名、女53名）。手づき：検査とのあいさつ、長谷川式老人用簡易知的精神機能評価スケール実施の際の状況、自由会話、などの表出言語を手がかりとする。テープレコーダー使用。

〔結果〕長谷川式スケールに拠り、知的機能を正常、境界、準痴呆、痴呆の4群に分けると、①対人対応：あいさつ、伝達への意欲、コミュニケーションセットの形成などは準痴呆状態でもなんとか維持されうる。②発話音声：言語活動の中では知的機能の群間差が比較的ゆるやかな側面である。③発話内容・意味：正常群と境界群にはほとんど差が認められないが、痴呆群は質疑応答の適合性の不良、発話量と情報量のバランスの不良が過半数を占め、痴呆群では自発発話が極めて少量の場合が多い片面で、過度の多弁の場合も認められ二極分化傾向が示唆される。④発話構文：正常群は複文構造を含む文章を全事例で表出しているが、痴呆が進むほど簡略化し、痴呆群は単語レベル以下が過半数を占めている。